青少年の迷惑行為と羞恥心

——公共場面における５つの行動基準との関連性——

菅原健介
永房典之
佐々木淳
藤澤文
薊理津子

Deviant Behavior and Shame in Japanese Adolescents—Five Behavioral Standards for Public Space—

Deviant behavior has become a social problem. In the present paper, two studies were conducted with university students in order to extract the five behavioral standards for public space, and to develop the scale with 20 items, Standard for Public Space Scale-20 (SPS-20). The correlations among SPSS-20, the frequency of deviant behavior, and embarrassment showed that those who were less concerned about the evaluation from local community tended to conduct more deviant behavior and had low sense of embarrassment. Furthermore, those who were more likely to go along with close peer-groups conducted more deviant behavior. It seems that the Japanese traditional social structure plays a significant role in these results.

公共場面での迷惑行為

近年，公共場面での逸脱行為や迷惑行為などの増加に伴い，若年層を中心とした社会規範意識の低下が議論されている．特に，従来ならば公共の場で決して行わなかった振る舞いが横行する光景に対し，日本人の伝統的な行動基準であった羞恥心の低下を指摘する声も大きい．こうした指摘を裏付ける調査も行われている．ベネッセ教育開発研究センター（1999a）では，高校生男女1500名余りを対象に，「電車の中」「道や駅前の広場」「学校の教室」の三つの状況の中で，「床に座る」「靴下を履きかえる」「化粧をする」「ものを食べる」などの行為を行うときの恥かしさを尋ねている．これによると，地べたに座るという行為に関して，場所が「電車の床」の場合に恥かしくないとする者は2割もいる．「道や駅前広場」になるとこの比率はさらに高まり，5割を超えることが示されている．人前での飲食に関しては場所が「電車の中」なら5割が，「道や駅前広場」なら8割が恥ずかしくないとしている．

また，同じくベネッセ教育開発研究センター（1999b）では，公共場面における他者の逸脱行為に対して高校生がどのような意識を持っているかを尋ねている．これによれば，「車内や街中での化粧」，「車内や街中でのキス」，「路上に座る」，「車内でソックスを履き代える」などに関しては，いずれも，5〜6割の高校生に許容されており，「絶対やめて欲しい」という強い否定意見は1割程度と少数であった．

本来，「地べた座り」「飲食」「化粧」「キス」「着替え」等は，プライベートな場所で行われる行為であり，これを他者の目がある公共場面で行うことは，従来の日本人の羞恥感覚や社会的通念から明らかに逸脱しているように思われる．しかし，上記のデータが示す通り，現在，青少年層のかなりの部分が，こうした行為を容認していることは，日本人の公共場面における規範意識に大きな変化が生じていることを示すものと言える．本論

文では，青少年の公共場面における行動基準について検討し，羞恥心研究の視点から「地べた座り」等，逸脱的行為の心理的背景について考察してゆきたい．

羞恥心の機能と心理的距離

ところで，そもそも羞恥心とは何なのだろうか．現代の青少年の羞恥心について考えるために，まず，その性質について明らかにする必要がある．進化心理学の視点から，羞恥心とは一種の“セキュリティーシステム”ととらえることができる（菅原，1998；Leary, 2001）．Baumeister & Leary (1995) によれば，人類という種の基本的な特徴は集団への依存性であるという．人類は，生殖，育児，食糧確保，保安等，様々な生活上の課題を個々人間の協力によって達成し，厳しい自然環境の中を生き延びてきた．従って，集団と距離を置こうとする個体は淘汰されてゆき，集団への依存性は人類の中で濃縮され，現代に至っているという．しかし，集団内での利益交換は単に「集団の中に物理的に居る」だけでは達成されない．他者に貢献し自己の役割を獲得する必要があるが，最低限，他者から嫌われ，排斥されないことが前提となる．Baumeister と Tice (1990) は，個人が集団から排斥される理由として，「集団の存続や福祉に貢献できないこと」「協調性や道徳性の欠如」「対人魅力の欠如」の三つを挙げているが，個人は自己の中にこうした要素を発見すると羞恥感などの不安感が生じ，自己改善の動機が高まるとしている．すなわち，羞恥心とは他者から排斥を受ける可能性のある要素がないかどうかを監視し，発見した場合には「恥ずかしい」という警報を発して対処を行うセキュリティーシステムに喩えられ，集団に依存して生きる人類にとっては不可欠な心的機能であると考えられる．

ところが，集団という概念はあいまいで，実際，個人の周りには多くの集団や人間関係が存在する．羞恥心はどのような集団に対して機能するの

だろうか．排斥を回避するという機能に注目するとき，失態を演じた場合に生じる羞恥感情の強度に関しては，次のような規定要因を想定することできる．一つは，自己の社会的印象（信頼や評価）の損傷度である．ダメージが大きいほど，排斥される可能性が高まるので強い羞恥感が生じやすい．他の一つは，失態を認知した相手がどの程度重要な存在なのかという要因である．相互の利益交換度の高い他者ほど，排斥された場合の損失は大きくなるので強い羞恥感が生じやすい．さらに，これら二つの要因は羞恥感に対して交互作用的な影響を及ぼす．すなわち，損傷が大きくても小さくても，相手が自分にとって重要でない場合には排斥の影響が薄いため羞恥感は高まらない．反対に，相手が重要な存在であれば，損傷の程度は羞恥感の程度に大きな影響を及ぼすと考えられる．従って，羞恥感は，相手の重要度と社会的印象の損傷度との積の関数として表現できる（佐々木，菅原，丹野，2005）．

上記の法則性を具体的な人間関係に当てはめたとき，他者との親しさと羞恥感との間には興味深い関係性を予測できる．親友や配偶者など極めて親しい相手から，見ず知らずの他者まで，対人関係は心理的距離にという次元上に分布しているが，一般に，心理的距離が近い相手は相互の利益交換が活発であり重要な存在である場合が多い．しかし，同時に，彼らは自己の人格や能力をよく知っているので，小さな失敗程度で印象は変化しない．つまり，心理的距離は印象の損傷度と負の相関がある一方，重要度とは正の相関を持つ．ここで，損傷度と重要度との積を考えると，心理的距離が近い相手の場合，重要度は高いが，印象の損傷度は小さいので，その積である羞恥感は低く抑えられる．一方，見知らぬ他者の場合，自己をよく知らないため，小さな失態でもそれによる印象の低下は大きい．また，関係は重要ではないので積の値は小さく，やはり，羞恥感は生じにくい．したがって，最も羞恥感が生じやすいのは，関係の重要性と印象の損傷が中程度な中間的な心理的距離にいる相手ということになる．このように，心理的距離と羞恥感は，羞恥感をタテ軸，心理的距離をヨコ軸に設定した

場合，逆U字型の関係性を示すことになる（堤，1992；佐々木，菅原，丹野，2005）．羞恥感の程度は，失態の内容や深刻度だけでなく，その失態をどのような他者や集団の前で犯したのかによっても大きく影響されると言える．

ミウチ，セケン，タニン

こうした関係性を，井上（1977）は日本人の社会構造という文脈で論じている．井上（1977）は日本人の羞恥心を支える集団として「セケン」の重要性を指摘した．「セケン」とは親密な「ミウチ」と無関係な「タニン」の中間的な位置にある人間関係である．セケンはミウチのような甘えが通用せず，また，タニンよりも重要な関係であり，失態による印象の損傷度はミウチに比べて大きく，また，失う利益の量もタニンに比べて多い．すなわち，セケンとは先の逆U字曲線の頂点にある最も警戒すべき人間関係であり，日本人はセケンの人々から排斥されないよう，セケンに対して恥ずかしくないよう振舞うという独特の行動基準を発達させてきたという．つまり，日本人の羞恥心は，特に，この「セケン」の人たちに対して機能していると考えられる．

井上（1977）のいうセケンは範囲の広い概念であるが，従来，その中心は近隣関係や地域社会といった地縁的人間関係であったと言えよう．日本の農耕文化の中で，多くの日本人は極めて長期に渡る定住型生活を営んでおり，その結果，世代を越えて密接に関わりあう地域的人間関係を作ってきた．こうした地域コミュニティーが，永らくセケンとして個人の価値観や規範の準拠枠を提供する集団として機能してきた．しかし，近年，人口流動化の進行や各種サービス産業の発展に伴い，地域社会への依存度は大きく低下した．隣人との心理的距離は遠くなり，地域社会は「セケン」として機能しなくなりつつある．

こうした地域コミュニティーに対する意識の変化が端的に反映している

場所のひとつが，「公共場面」である．たとえば，同じ地域の人々は同じ駅から電車に乗る．従って，車内には近隣の知人や顔見知りが存在する可能性は高かった．それゆえ，「誰が，知り合いが見ているかもしれない」「近所の噂になったらまずい」という感覚が働き，電車内は羞恥心が個人の行動コントロールする「セケン」の範囲であった．ところが，大元の地域社会がタニン化してしまうと，その延長である公共場面も無関係なタニンの集まる場所でしかなくなり，恥じらいによる抑制力は低下していった．従って，それまで抑えられてきた「化粧をする，食べる，座る」といった私的な行動も，衆目の中で堂々と行われることになったと考えられる．

研究の目的

こうした仮説を検証するためには，公共場面において人々がどのような基準によって行動しているかを測定する必要がある．そこで，本研究の第一の目的は，上記のような公共場面における意識を，「行動基準」という概念によって定義し，その測定尺度を作成することである．行動基準とは個人が自らの行動を制御する場合，重視する目標や手がかりであり，必ずしも行動規範のような道徳的価値を含むものではない．今回は，井上のセケンの理論に従い，現代の青少年が公共場面において用いる可能性のある行動基準として以下の5つを想定した．地域社会が「セケン」の機能を果たしていれば，その延長線上のある公共場面はやはり「セケン」として認識される．「近所の人に見られて恥ずかしいことはしたくない」といった“地域社会からの社会的評価”を基準に行動は制御されるはずである．ところが，近年，地域社会の関係性が弱まり，近隣がタニン化してゆくに伴い，その延長線上にある公共空間もタニンの場になりつつある．従って，「何をするのも個人の自由」といった“自己の利益や自由”を最優先する基準が登場してきたと考えられる．他方，セケンの機能は地域社会を離れ，同じ趣味志向を持つ人々や同年齢集団，あるいは特定の業種や業界などに

分散した．これに伴い，「友だちのみんながやっていることに乗り遅れたくない」など，“仲間集団への同調”を基準とする行動パタンも顕著になりつつある．しかし，地域社会の崩壊は，セケンの機能を多集団に分散化させるだけでなく，逆に，特定の地域を超えたグローバルなセケン意識を形成するきっかけになるとも考えられる．同郷や特定の集団の仲間に限定されず，同じ社会，同じ時代を生きる市民として，“見知らぬ他者への配慮”や，さらに広い“社会全体の公共の利益や公平性”を重視する行動基準が成立する可能性もあるだろう．現代社会の公共場面においては，上記のような様々な基準が並存しており，個人によって何を重視するかに差異があると考えられる．こうした行動基準の個人差を測定するためのツールを作成する．

本研究の第二の目的は，逸脱行為や迷惑行為に，公共場面での行動基準がどう関っているかを検討することである．想定された5つの行動基準はいわば，自己の行動を制御する際に，何を準拠集団と考えるかの問題とも言える．準拠集団が狭く特定化してゆくほど，彼らの行動基準はその他大勢の人々のスタンダードや利益から乖離してゆく可能性が高くなる．これまで日本人の準拠集団として重要な地位を占めていた地域社会が崩壊してゆく中，特定の気の合う仲間集団だけを新たな行動の準拠枠と定めれば，その分，行動は周囲から逸脱するであろうし，さらに，集団に所属せず自分自身の利益にのみ基準を求めれば，逸脱度はさらに大きくなるはずである．逆に，準拠集団が“ご近所さん”だけでなく，公共場面で関る見知らぬ他者やさらに社会全体の利害にまで及べば，規準は一般化し迷惑行為は生じにくくなるだろう．こうした仮説が正しければ，公共場面で迷惑行為を行う者は，そうでない者に比べ，“地域からの評価”，“他者配慮”，“公共利益の基準”を重視せず，“仲間集団への同調”や“自己利益”の基準を優先させていることになる．本研究の第二の目的は，こうした仮説を実証的に検証することである．

行動基準の作成と逸脱行動との関連性の検討のため，本研究では2つの

調査を行った．第1研究は，上記に示した5つの行動基準が実際に区別できるかどうか，公共場面における大学生の意識構造を探索的に分析する．加えて，逸脱的行為との関連性について予備的な検討を行う．第2研究では，第1研究を踏まえ，公共場面における行動基準尺度を作成し，その信頼性，妥当性を確認するとともに，逸脱的行為との関係性を確認する．

研究1

方法

①調査対象：本研究は質問紙調査によって行われ，大学生男子219名，女子241名の計460名から回答を得た．

②調査内容：学年，性別，年齢，出身地などの他に以下の項目が含まれていた．

公共場面での行動基準を測定する45項目について，当てはまる程度を5件法で尋ねた．これらの項目は上記の5つの行動基準の考え方を基に，項目を作成，収集したものである．これに加え，電車の床に座る，電車の中で飲食するなど，12項目の迷惑行為について，経験頻度（4件法），各行為を恥ずかしいと思う程度（5件法），各行為に罪悪感を覚える程度（5件法）について尋ねた．

結果と考察

①公共場面における行動基準尺度の検討：行動基準に関する45項目について，因子分析（最尤法，プロマックス回転）によって構造を検討した．項目を出し入れして構造を探ったところ，5つの因子を抽出することができた．第1因子に負荷の高い項目は，「なるべく多くの人の立場を考えて行動する」「どんな人に対してでも人権を尊重する」など，社会全体の利益や公平さを行動の基準とする態度であった．そこで，この因子を「公共利益」と呼ぶことにする．第2因子は「問題を起こして近所の噂になるの

がいや」「警察に捕まったら，恥ずかしくて世の中に顔向けできない」など，地域社会からの評価を重視する態度であり，「地域的セケン」の因子と名づけた．第3因子には「友だちのみんながやっていることに乗り遅れたくない」「仲間はずれになるくらいなら，一緒に悪いこともしてしまう」等，身近な人間関係，仲間集団と歩調を合わせることを行動の基準とする態度であり，「仲間的セケン」の因子と考えられる．第4因子は，「見知らぬ人々に対してでも自分の立場に立って考える」「自分が人の迷惑になっていないか常に考える」などの負荷が高く，無関係な他者に対しても配慮を重視する基準であり，「他者配慮」と名づけた．最後の第5因子は，「法律に触れるようなことをしなければ，あとは個人の自由」「人に怒られなければ何をしても許される」など，他者の目を気にせず自身の自由や利益を大切にする行動基準である．従って，この因子を「自分本位」と名づけた．

このように，公衆場面での行動基準として，「自分本位」「地域的セケン」「仲間的セケン」「他者配慮」「公共利益」の5つの因子が抽出され，これは当初想定した5つの行動基準とほぼ対応するものであった．そこで，それぞれに負荷の高い4項目ずつを以って下位尺度を構成した．α係数は第5因子が.58と低かったが，他はすべて.70を超えていた．尺度として課題は残るが，公衆場面での行動基準が予想通りに5つに分類できることが示された．

②迷惑行動の尺度構造：まず，12項目の迷惑行動の経験頻度について主成分分析を行った結果，7項目に関して1因子構造が確認された．また，それらの迷惑行為について「恥ずかしさ」および「罪悪感」を覚える程度についても主成分分析を行ったところ，いずれも1因子にまとまった．信頼性係数αは，迷惑行為の頻度では.70，迷惑行為を行うことの「恥ずかしさ」，「罪悪感」に関しては，それぞれ.82と.80であり十分な値が得られた．そこで，これら7つの迷惑行為の「頻度」「恥ずかしさ」「罪悪感」の合成得点を算出し後の分析に使用した．尚，7つの迷惑行為とは，「電

車の床に座り込む」「繁華街の道に座り込む」「電車の中で飲食する」「電車の中で音漏れするほど大きな音でCDを聴く」「道を歩きながら飲食する」「道に紙くず吸殻などを捨てる」「電車の中など人が静かにしている場所で大声を出す」であった.

③パス解析：次に，5つの行動基準と迷惑行為との関係を検討するため，上記の各行為を行うことへの「恥ずかしさ」,「罪悪感」が迷惑行為を抑制し，またこれらの感情の程度は行動基準によって規定されるというモデルを仮定しパス解析を行った.

まず,「罪悪感」からのパスは有意でなく，迷惑行為は「羞恥感」によってのみ強く抑制されることが示された．また，この「羞恥感」に対しては,「自分本位」からの負のパスと,「地域的セケン」や「他者配慮」からの正のパスが確認された．すなわち，地域の人々の目を気遣うことは迷惑行為への恥ずかしさを高めるが，周囲の人々を無関係な“タニン”として無視する態度は恥ずかしさを弱めていた.

第二に，迷惑行為は「羞恥感」を介すパスとは別に,「自分本位」と「仲間的セケン」によって直接的に促進され,「他者配慮」によって直接的に抑制されることも示された．また，特定の仲間関係など「仲間的セケン」の基準を重視する者は，恥ずかしさとは関係なく迷惑行為の頻度が高いことも示された．友人たちがやっているので自分もやらないと恥ずかしいという同調性を高めているように思われる.

総じて,「自分本位」,「仲間的セケン」の基準は迷惑行為を強める一方で,「地域的セケン」,「他者配慮」の基準は迷惑行為を抑制しており，迷惑行為に関しては，それぞれの行動基準が独特な影響を与えていることが示唆された.

研究2

研究1では，公共空間における行動基準の構造を探索的に検討し，5つ

の因子を明確化した．研究2ではこの知見に基づき，5つの行動基準を測定する尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検証する．また，作成された尺度を用いて，研究1でも示された「自分本位」や「仲間的セケン」が迷惑行為を高め，「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」が迷惑行為を抑制するとの知見を再確認し，個人の準拠枠の広さが迷惑行為の生起に関わっているという仮説を検証する．

方法

①調査対象：本研究は質問紙調査によって行われた．首都圏の4年制大学，および短期大学に在籍する学生597名（男子119名，女子476名）から回答を得た．

②調査内容：学年，性別，年齢などの他に以下の項目が含まれていた．

1）公共場面での行動基準を測定する20項目．研究1の結果に基づき，項目を選択，修正したものである．当てはまる程度を5件法で尋ねた．

2）研究1と同様，電車の床に座る，電車の中で飲食するなど，7項目の迷惑行為について，経験頻度（4件法），各行為を恥ずかしいと思う程度（5件法），および，これらの行為を周囲の大人たちがどう見ていると思うかを，「全く不快ではない」から「とても不快である」までの4段階で評定させた．

3）永房（2002）の恥意識尺度．この尺度は「親」「先生」「一般社会」「友人」「道徳」の5つの評価基準に対して，恥ずかしさを感じる程度を測定するものである．

結果と考察

①行動基準尺度の構造：行動基準を測定する20項目について，因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行った．初めに，男女別に検討したところ構造に違いがなかったので，データを込みにして分析を行った．その結果，表1に示すように，研究1と同様の構造が確認された．第1因子から

表1　行動基準尺度の因子構造

	地域的セケン	仲間的セケン	自分本位	他者配慮	公共利益
世間から笑われるようなことだけはしたくない	.909	−.082	.062	−.012	−.050
警察につかまったら，恥ずかしくて世の中に顔向けできない	.755	−.052	−.029	−.030	−.037
周りから変な人と思われないように気をつけている	.634	.108	.014	.047	.005
何か問題をおこして近所の噂になるのは嫌だ	.611	−.037	−.048	−.020	.057
友だちがみんなで悪いことをしているのに自分だけ裏切れない	−.043	.810	−.013	−.046	.039
仲間がみんなやっているのに自分だけやらないのは恥ずかしい	−.029	.761	−.077	.008	−.043
悪いことでもみんなで一緒にやれば平気でできてしまう	−.120	.672	.139	−.004	−.008
友だちのみんながやっていることに乗り遅れたくない	.285	.518	.024	.017	.006
法律に違反さえしなければ，あとは個人の自由だ	.011	−.078	.815	.079	.033
人に怒られなければ何をしてもよいと思う	.052	−.014	.776	−.088	.045
お金さえはらえば何をしても許される	−.005	.129	.562	−.006	−.042
何をしようが自分の勝手だと思う	−.068	.034	.518	.002	−.061
見知らぬ人に対してでも相手の立場になって考える	−.117	−.059	.015	.771	−.055
他人に迷惑がかかりそうなら身勝手な行動は慎む	−.004	−.055	.015	.735	.027
人に迷惑になるかどうかを，まず第一に考えて行動すべき	.080	−.032	−.007	.566	.078
自分が誰かの迷惑になっていないか常に気を遣う	.097	.143	−.042	.534	−.049
仲間と考えが違ったりしても，それぞれの意見を大切にする	.000	−.045	.044	−.036	.818
数人の意見だけでなく，少数の意見にも耳をかたむけるべき	−.022	−.014	−.060	−.099	.779
どんな人に対してでも人権を尊重する	−.059	.027	.044	.211	.514
みんなで話し合って決めたことは守らなければならない	.168	.140	−.072	.118	.321

順に，「地域的セケン」「仲間的セケン」「自分本位」「他者配慮」「公共利益」と解釈できる．それぞれの因子に負荷の高い4項目ずつの合成得点を算出し，各下位尺度の得点とした．

②信頼性：各下位尺度に関してα係数を算出したところ，.72〜.81と概ね満足できる値を示した．

③尺度の構成概念妥当性：「自分本位」「仲間的セケン」「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」の基準は，この順に準拠集団の範囲は広くなると考えられる．尺度が妥当ならば，隣り合った行動基準は類似しているので相互の相関は高くなり，離れた行動基準の相関は低くなるはずである．この点を確認するため，特定の2つの基準の偏相関係数を，他の3つの基準をコントロールした上で算出した．図1は.20以上の有意な相関を示したものであるが，隣接した基準間にのみ関連性が示されている．他の組み合わせについては，無相関，もしくは0.1以下の極めて弱い相関しか認められなかった．このような尺度間の関連性は，本尺度の構成概念妥当性を支持するものと言える．

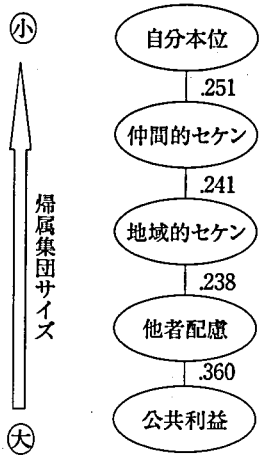

図1　5つの行動基準間の関連性
＊相関係数はいずれも0.1%水準で有意

これに加え，本尺度と永房（2002）の恥意識尺度との関連性を検討した．恥意識尺度は「親」「先生」「一般社会」「友人」に対して，どの程度恥ずかしさを感じるかを測定するものであり，それぞれの人物からの評価を準拠枠として重視する程度を示すものである．表2は尺度間の相関係数を示したものである．「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」は「先生」「一般社会」など多くの対象と正の相関を示しているが，また，「仲間的セケン」は「友人」との間にのみ飛びぬけて高い正の相関を示し，友人関係のみを準拠枠としていることが示されている．さらに，「自分本位」はいずれの対象とも負の相関を示し，特に，「一般社会」や「先生」の評価を重視しない傾向が示されている．図1のように，「仲間的セケン」や「自分本位」は，その他の基準に比べ，準拠する他者や集団が狭く限定化されていることが示され，この結果も尺度の構成概念妥当性を示していると言える．

表2　恥意識と行動基準尺度との関連

	地域的セケン	仲間的セケン	自分本位	他者配慮	公共利益
親	.190**	.003	-.148**	.207	.140**
先生	.350**	.026	-.203**	.302**	.232**
友人	.291**	.424**	.019	.157**	.056
周囲	.210**	-.178**	-.300**	.373**	.299**
道徳	.208**	-.074	-.195**	.274**	.306**

**: p<.001

④迷惑行為との関連性：研究1で分析の対象となった7つの迷惑行為に関して，研究2ではその「経験度」，「羞恥感」，および「周囲の人々の不快感」について評定してもらった．主成分分析の結果，3つの側面すべてについて強い1次元性が認められたため，合成得点を算出した．尚，α係数は順に，.75/.72/.75と満足できる値であった．この3つの側面間の関連を検討したところ，「周囲の不快感」と「経験」との間には負の相関が認められるが，「羞恥」を統制すると相関関係は消えてしまう．一方，「羞

恥」と「経験」の間には，「周囲の不快感」を統制しても負の相関（-.332）が認められる．尚，「羞恥」と「周囲の不快感」との間には「経験」を統制しても強い正の相関が認められた（.530）．すなわち，迷惑行為は，「周囲が不快に思っていると感じる」から抑制されるのではなく，「自分が恥ずかしいと感じる」ことで抑制されることを示している．ただし，「恥ずかしいと感じる」のは，「周囲が不快に感じている」からであり，「周囲の不快感の認知」⇒「羞恥感」⇒「迷惑行為の抑制」という関係が成り立っていると考えられる．

表3はこれら3つの側面と行動基準との相関係数である．「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」は「羞恥」と「周囲の不快感」とは正の相関，「経験」とは負の相関が認められた．他方，「自分本位」はこれと全く対照的な関係が示されている．また，「仲間的セケン」は「経験」に対してのみ，弱い正の相関が示されている．

表3 迷惑行為の経験、羞恥、周囲の不快感認知と行動基準の相関

	地域的セケン	仲間的セケン	自分本位	他者配慮	公共利益
経験	-.220**	.195**	.269**	-.213**	-.115**
羞恥	.273**	-.064	-.260**	.272**	.233**
周囲不快	.220**	.012	-.196**	.215**	.261**

**: p<.01

最後に，迷惑行為に対して，これらの諸変数が全体としてどう関っているかを明確化するため，パス解析を行った．基本モデルとして，先に示されたように，迷惑行為が周囲の人々を不快にしているという認知が羞恥感を高め，その羞恥感が迷惑行為を抑制するという流れを仮定し，これに行動基準がどう影響を及ぼしているかという視点で分析を行った．尚，ステップワイズ法により有効な変数を抽出したが，その際，有意水準を0.1%以下として，有意なパスを確定した（図2参照）．

パス解析においても，「経験」「羞恥感」「周囲の不快感」の関連性は再確認された．周囲を不快にさせているとの認識が羞恥を喚起し，これが迷

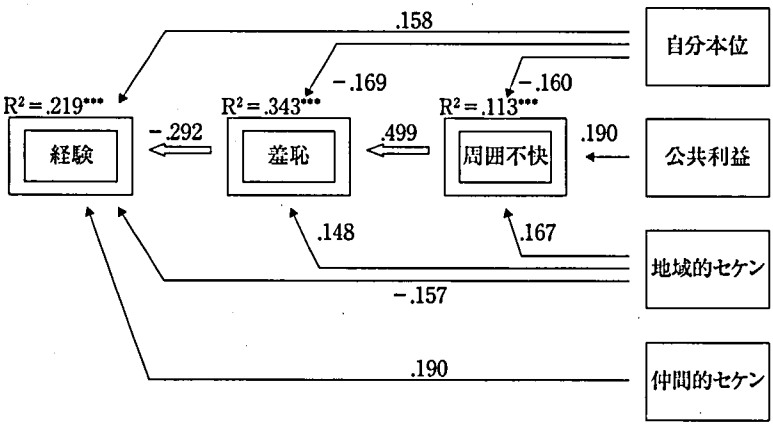

図2　迷惑行為と諸要因のパス図
＊標準化偏回帰係数はいずれも 0.1% 水準で有意

惑行為を抑制するという図式である．また，この3つのプロセスに対して，各行動基準は特異な影響を与えている様子がうかがえる．「地域的セケン」の基準を重視する者ほど，「周囲の不快感の認知」を高め，それを恥ずかしいと感じ，迷惑行為を慎んでいる．一方，「自分本位」の基準は，上記とは正反対に，周囲の不快感の認識を妨げ，恥ずかしさを抑制し，迷惑行為を促進させている．これに加えて，「仲間的セケン」は迷惑行為を促進し，「公共利益」は周囲を不快にさせているという認識を高めるよう作用していた．こうした図式は研究1で予備的に行った分析結果と極めて類似していた．異なるサンプルにおいても，同様の傾向が認められたことは，迷惑行為と行動基準の関連性が安定したものであることを示している．駅前や電車内などの公共の場をセケンの空間としてではなく，無関係なタニンの空間として認知する人ほど，迷惑行為を行うことが確認されたと言える．

総合考察

本論文は，公共空間における迷惑行為の増加という社会問題について，行動基準という視点から検討を行った．佐々木ら（2005）による心理的距離と羞恥感との関連性の理論や井上の世間論を基礎に，公共場面において行動の基準となる5つの要素を明確にした．それは「自分本位」「仲間的セケン」「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」である．今回は，まず2つの調査によって，これらの基準の重視度を測定する尺度を作成した．因子分析等を用いて構造を検討した結果，確かに，これらの5つの基準は区別が可能であることが示され，これに基づいて20項目から成る「公共場面における行動基準尺度（Standard for Public Space Scale: SPS-20）」を構成した．

5つの行動基準は，それを重視する者が準拠する集団の広さという観点から概念的に整理すると，「自己」「仲間」「地域の知り合い」「他者一般」「市民社会」の順で範囲が広くなると考えられる．下位尺度間の相関分析の結果，「自分本位」「仲間的セケン」「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」は隣り合う尺度同士の間にのみ，相関が認められ，これらが一列の連関構造を成していることが示唆された．さらに，恥意識尺度との関連を検討したところ，「地域的セケン」「他者配慮」「公共利益」は多くの対象者の視線を気遣うのに対し，「仲間的セケン」は身近な友人の目だけを，また，「自分本位」は誰の目も気遣わない傾向が認められた．下位尺度間のこうした特徴は，準拠集団の広さの差異を反映したものであり，構成概念妥当性は確認されたと言える．

ところで，狭い範囲の基準に準拠するほど行動は私利的，特異的となるので，範囲外の他者と利害が対立したり，奇異な印象を持たれたりする．特に，車内や駅前などで昨今話題となっている行為は，従来，地域社会を準拠枠とする個人にとって，あくまで恥ずかしいとされるものであった．しかし，地域社会を準拠集団として認知しない者の増加に対応し，自己利

益の保護というより狭い基準に準拠する個人が増加したことにより，公共の場での恥の意識は薄れ，迷惑行為の増加につながったとの仮説を立てた．すなわち，公共の場において，「地域的セケン」の基準を捨て，「自分本位」の基準を採用した者ほど，迷惑行為を行いやすいと考えられた．

二つの調査を通じて，パス解析の結果はこれを支持するものであった．特に，研究2において，迷惑行為を周囲の人々が不快に感じていると認知することで，自分を恥ずかしく思い，それによって当該の行動が抑制されるという基本的なプロセスを確認できたが，「地域的セケン」の基準はこれを促進させ，「自分本位」の基準はこれを抑制することが示された．また，「仲間的セケン」の基準は，迷惑行為の認知や羞恥感とは関連しないが，「みんながやるなら自分も」という同調性を刺激し，迷惑行為を促進する効果が見られた．こうした「仲間的セケン」の影響は，地域社会の崩壊に伴い準拠枠が小さくなったことが，迷惑行為に結びついている様子を示すもう一つの根拠と言えよう．

「地域的セケン」よりも基準枠が広い，「他者配慮」や「公共利益」の基準は迷惑行為の抑制に明確な寄与をしていなかった．これは，本研究で扱った“床に座る”，“車内飲食”などの迷惑行為が，もともと社会規範や公衆道徳といった高次の基準ではなく，近隣や地域の目によって抑制されてきたからだと考えることができる．地べた座りや車内飲食などは，他者に不快感を与えるものの，明確な物理的な損害を与えるものとは言い切れない．いずれも，問題の本質は，もし知り合いに見られたら，「みっともない」，「印象を悪くする」ということであり，最終的に損失を被るのは本人である．これに対して，「他者配慮」や「公共利益」の基準は，あくまで他者の利益を考慮する点に特徴がある．それゆえ，「結局は自分が損」という地べた座りなどは，これら高次の基準の範囲外なのかもしれない．それゆえ犯罪性が明確な行為を扱えば，「他者配慮」や「公共利益」の効果はより明瞭になると予測される．

今回作成された行動基準尺度は，まだ検討の余地があるかもしれない．

公共場面における基準が，これ以外に無いとは言えないし，尺度構造もやや不安定な面も認められる．また，迷惑行為の担い手として，本研究では大学生を対象としたが，こうした行為がより顕著に見られる中学生，高校生に関しても検討してみる必要がある．さらに，迷惑行為として，地べた座りなどを取り上げたが，より犯罪性の強い非行行動などについても，行動基準の影響を検討してみる必要があるだろう．

公共場面における行動基準は性格特性ではない．社会構造と社会環境の変化に連動して変化する社会的態度である．それゆえ，この概念は心理学的社会心理学と社会学的社会心理学との橋渡しとして有用性を発揮することが期待できる．ただし，実際に，社会的環境と行動基準が連動していることは実証されていない．社会学的変数などとの関連性も含め，検討すべき課題は残されている．

付　記

本研究は，平成17年度厚生労働科学研究費補助金　子ども家庭総合研究事業”要保護児童のための児童自立支援計画ガイドラインの活用と評価に関する研究（H17-子ども-015）によって行われた．また，本研究を実施する上で聖心女子大学大学院社会文化学研究科，芝本華子さんの協力を得た．

引用文献

Baumeister, R. F.& Leary, M. R. 1995　The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation, *Psychological Bulletin*, 117 (3), 497–529.

Baumeister, R. F.& Tice, D. M. 1990　Anxiety and social exclusion. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 2, 165–195.

Benesse 教育研究開発センター　1999a　範感覚の崩れ～高校生の価値観　深谷昌志（監修）モノグラフ・高校生 Vol. 55

Benesse 教育研究開発センター　1999b　高校生の他者感覚～ゆるやかな人間関

係の持ち方～　深谷昌志（監修）モノグラフ・高校生 Vol. 56
井上忠司『世間体の構造』NHK ブックス
Leary, M. R. 2001 Shyness and self : Attentional, motivational, and cognitive self-processes in social anxiety and inhibition. In. Crozier, W. R. & Alden, L. E. (Eds.) Interpersonal Handbook of Social Anxiety : Concepts, Research and Interventions Relating to the Self and Shyness. 217-234. John & Wiley & Sons, New York.
永房典之　2002
恥意識構造の国際比較―日本・アメリカ・トルコの中高生を対象にして―
日本社会心理学会第 43 回大会発表論文集，574-575
佐々木淳・菅原健介・丹野義彦　2005
羞恥感における逆 U 字的関係の成因に関する研究～対人不安の自己呈示モデルからのアプローチ～．心理学研究，76，5，445-452.
菅原健介　1998　人はなぜ恥かしがるのか　サイエンス社
堤　雅雄　1992　想像的他者との心理的距離の関数としての羞恥感　島根大学教育学部紀要（人文・社会科学），26，87-92.